

一読総合法による自己学習力の育成

江田島市立高田小学校 東 克則

1 実践の趣旨

一人一人の子どもが自ら問いを発し、課題意識をもって意欲的に文章を読み進めるための学習指導の一つの方法として本実践に取り組んだ。

2 実践の概要

(1) 単元名 人物の考え方や生き方をとらえよう

主教材「わらぐつの中の神様」(光村図書 5年下)

(2)単元の目標

○単元を見通して学習を進め、学習の振り返りを行うことができる。

○叙述に即して登場人物の気持ちを考えながら意欲的に読み、その考え方や生き方をとらえることができる。

(3)手立て

①単元を見通して学習を進め、学習の振り返りを行うことができるようにするために

・学習者自ら学習計画を立てさせ、一時間一時間の学習を把握させる。

②登場人物の気持ちを考えながら意欲的に読み、その考え方や生き方をとらえることができるようにするために

・教材文を一読総合法で扱い、「次はどうなるのだろう」という期待感をもたせる。

・「読みのめあて」を設定する。

③自己学習力を育成するために

・一人一人の読みである「ひとり読み」をさせ、クラス全体での話し合いの前に、自分の考えをもっておくようにさせる。

・「ひとり読み」をもとにして話し合いを進めることで、学習者が主体的に学習に参加し、学級全体で疑問や考えを素直に出し合い、読みを高めあうようにさせる。

・ワークシートを使わず、ノートを使う。

(4)指導計画

第一次 (3時間)	【学習計画を立て、学習のかまえをつくる】 ・読みのめあてをつかみ、学習計画を立てる。 ・難語句などを調べる。 ・新出・読みかえの漢字を学習する。
第二次 (8時間)	【「わらぐつの中の神様」を、場面ごとに読み深める】 ・「読みのめあて」(登場人物の会話や行動から気持ちを考えよう)に沿って、立ちどまりごとに話し合いをし、読み深める。
第三次 (3時間)	【学習のまとめをする】 ・学習したことをもとに、感想を書く。 ・「方言と共通語」を学習する。 ・漢字・語句の復習をする。(テストをする。)

(5)授業の様子

①第一次

学習者自らが学習計画を立てることができるための基礎として、単元を通してどのようなことを学習するのか、そのための学習の流れ(単元構成)はどのようなものなのか、読みを進めていくための「読みのめあて」とはどのようなものなのか等、発問を中心に教師主導で学習を進めた。児童が活発に反応し、意欲的に取り組む姿を見て、このような経験を積むことによって児童自身が学習計画を立てることができるようになって感じた。

②第二次

まず、個の読みである「ひとり読み」の指導をした。「読みのめあて」に沿って、「ここにこう書いてあるから、自分はこう考える」というパターンと「今まで学習したことを基にして自分はこう考える」というパターン、疑問や質問のパターンなど、自分が文章を読んで感じたこと・考えたことをノートに書き出すことを例示した。そして、「ひとり読み」を全体の場に出し、話し合う中で共有の「読み」をつくりだしていくことを積み重ねていった。同じ言葉や表現からイメージする世界が人によって異なることがわかったり、思い込みや読み違いによる個々の「ひとり読み」の修正ができた。そして、その話し合いが次の「ひとり読み」に生かされている児童も出てきた。また、登場人物に寄り添ってたくさん「ひとり読み」ができるようになった児童もいた。特に、働き者のおみつさんが一生懸命にわらぐつを編んだのに悪口を言われた場面では、おみつさんに同調し、しっかり物語に入り込むことで想が広がった児童が多かった。今回の児童の読みで一番驚いたのは、「若い大工さんがおみつさんにプロポーズしたのは、おみつさんの編んだわらぐつがじょうぶで長もちするようしっかり編みこまれていて、そのわらぐつに込められたおみつさんの心(=神様)が見えたからだ。」ということがすんなり出てきたことだった。今までの私が受け持っていたクラスでは、この場面「若い大工さんは、おみつさんにひとめぼれして、それでわらぐつを買ってくれたんだと思った。」という読みが必ず出され、それがもとになって「神様」の正体を探っていくことになっていた。

③第三次

感想で「マサエの考えが変わったのは、わらぐつの中に神様がいることがわかったからだ」ということをほとんどの児童が書いていた。また、この「神様」ということが、ある「もの」やある「こと」にこめられた一生懸命な気持ちであることを理解し、「サンタクロースはいないと思っていたけど、プレゼントに込められた『喜んでもらいたい』という一生懸命な気持ちがわかることが大切で、それがサンタクロースだと考えるようになった。」という意味の感想を書いた児童もいた。

3 成果と課題

一人一人の児童が意欲的に学習に取り組み、自己学習力を育成するために、まず、学習計画を立てることができるということを挙げ、指導した。今回が最初であり、この経験を積み重ねていくことが大切である。学習を人任せにせず、自分で進めるためには、やるべきことがどんなことなのか、それをいつまでにしなければならぬということがわかることが必要であると考えた。それがわかると、自分自身での振り返りができるようになる。

- 教材文を一読的に扱ったことで、期待感をもって読み進めることができた。この「わらぐつの中の神様」は、一場面と三場面がマサエを主人公とする現在の話で、その中に二場面としておみつさん(=おばちゃん)を主人公とする過去の話が入り込んでいる。子どもたちは、おばあちゃんとマサエの会話から過去の話に引き込まれ、おみつさんに心を寄せて物語の世界に入っていくことができた。
- 本教材文で考えていくべき「神様」の正体を理解し、単元の目標である、「おみつさんの考え方・生き方、それに共感した若い大工さん、さらには、わかりあうことのすばらしさを学ぶ」ことができた。
- 「ひとり読み」を鍛えていくことが必要である。「ひとり読み」としてどのようなことを書き出しすればよいのか、クラス全体で話し合いをしながら、また個別指導をしながら判断する力をつけていくことである。授業者としては、「ひとり読み」の個人差を、話し合いの場でどう生かしていくかが課題となる。